

武蔵野大学学術機関リポジトリ Musashino University Academic Institutional Repository

育児期の親のSelf-Monitoringと世代継承性（Generativity）の関連について

著者	森屋 啓子
著者（英）	Moriya Keiko
雑誌名	人間学研究論集
号	9
ページ	65-80
発行年	2020-03-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1419/00001232/

育児期の親の Self-Monitoring と世代継承性 (Generativity) の関連について

森 屋 啓 子

1. 問題と目的

従来から、母親の養育を子どもの発達に影響を及ぼす要因と捉えた多くの研究が行われ、特に Bowlby (1973/1977, 1980/1999, 1982/1997) は、母子関係の重要性、特異性を主張している。わが国では、子どもの発達における母子関係の重要性が主張される一方で、「子育てを私事とし公的な助力が救済的なレベルにとどまっていることを補完するように、特に3歳までの母親以外の代替者によるケアを否定する見方(母性神話)が支配的だった」(小出、1990)と述べられている。このような社会的背景の下で育児期の母親が抱える育児不安の増加が問題視されたことを受けて、「育児と母親」というテーマの研究も盛んにおこなわれ(岡本、1996、2002; 小原、2005; 荒牧・無藤、2008; 小林・会沢、2009、2010、2011、2012、2013、2014)、その研究対象は両親(柏木・若松、1997; 白井、2004; 福田・宮下、2006)、父親へ広がっている(矢澤・国広・天童、1999; 森下、2006; 島崎・田中、2007; 尾形、2011)。また、2015年版厚生労働白書では、20代から40代の子育て中の男女を対象とした育児に関する調査結果が示されている。この中で、特に母親は育児に関して父親よりも悩みが深く、その理由として父親と比べて母親は「育児について特に負担に思っている」との結果が得られている。さらに、子育てに十分に関わっていない父親に関しての質問項目では、父親自身はその理由を「仕事が忙しすぎる」と挙げている。これに対して、母親はその原因を「個人的な楽しみの方を大切にする」「子育ての大変さを理解していない」ことだとする回答が多く(厚生労働省編、2015)、父親と母親とで、育児または育児に携わる認識に関して大きな隔たりがあることを表している。これは柏木(2007)が述べた、育児期の母親の認識が周囲の認識と離れ、母親が心理的に孤立する原因の一つとも考えられることも示唆している。さらに柏木(2007)が説明した、多くの母親は不安を抱えながら育児をする中で、社会からの孤立感、「自分」喪失の不安、夫との関係への不満の3つの要素から育児不安を抱えることも支持している。

以上のように、近年のわが国の育児は、女性の社会進出の促進や国の施策の後押しによって育児へ取り組む父親と母親それぞれの役割や家族システム自体の変革を余儀なくされているのが現状である。また、児童福祉法の改正ⁱや児童虐待の防止などに関する法律ⁱⁱ等の整備も進み、育児環境の整備は喫緊の課題であるといえる。2015年4月には子ども・子育て関連三法ⁱⁱⁱが、2016年4月には女性活躍推進法^{iv}が全面施行され、多様な環境整備により女性の社会進出が促進されている中、2010年に発表されたイクメンプロジェクトで脚光を浴びた“もう一人の養育者”である父親の存在も見直されるべきであろう。父親を研究対象とした佐々木(1996)は、父親とな

り、養育を行う生活プロセスは人間発達の可能性の中で最も意義深い変容経験であると述べている。しかし、一方で日本の父親が、日本、韓国、タイ、アメリカ、イギリス、スウェーデンの父親と比較して、父親としての成長・発達を「いつも感じる」割合が低いことを挙げ、育児関与行動の欠落ないしは不十分なかかわりが父親の人格発達に影響するまでに至っていない事を指摘している（佐々木、1996）。育児は私たち人間の成長発達にどのような影響を与えているのか。このことを紐解くため、2つの理論に着目した。1つはEriksonが提唱したアイデンティ発達の一時期世代継承性（Generativity）であり、もう1つはSnyderの“Self-Monitoring”理論である。

世代継承性（Generativity）とは、Eriksonによって提唱された人生の第Ⅶ段階に顕著になる心理社会的課題である（Erikson, 1980 西平・中島訳 2011）。そもそも育児期とは人間発達の過程ではどのような位置づけなのか。Erikson（1980）は、成人期を3つの段階（前成人期、成人期、老年期）に分けて説明し、成人期は、世代継承性（Generativity）と停滞（Stagnation）の2つの対概念で説明している（Erikson, 1980 西平・中島訳 2011）。岡本（2018）は「『世代継承性』とは、次世代の創生とケアを意味し①次世代を生み出すことと育てること、次世代の成長に深い関心を注ぎ、関与すること、②ものを生み出すこと・創造すること、③他者を支えること」などと述べている。さらにこの概念には、親による子育てにとどまらず、専門家が弟子を育成すること、仕事を通じて広く次世代の社会を育てることまで、さまざまな次元の営みが含まれていると説明している（岡本、2018）。特にEriksonは、「世代継承性（Generativity）の豊かな獲得によってある種の「人類への信頼」が子どもを地域社会に歓迎された授かり物として見せる」と述べ、子の成長発達が社会へ派生する構図を説明している（Erikson, 1980 西平・中島訳 2011）。つまり、育児に対する価値観が反映されるものとして考えることができる。

一方、Self-Monitoringは、Snyderによって「自己の表向きの外見と内側の現実という複雑な心の織物」と定義されたものである（Snyder, 1986 齊藤訳 1998）。自分自身という存在が社会人になり、夫や妻になり、さらに父や母になった子どもを持った父親と母親は、複雑な多数の役割を成長発達の過程でどのように使い分けているのか。Snyder（1986）は、人は誰でも社会的な状況や人間関係の中の自分をモニターすると述べ、その度合いが千差万別であると説明した。自己監視度が高い人を“高モニター”とし、実際の人間関係の場面で自身のイメージをコントロールしているといい、逆に自己監視度が低い人を“低モニター”とし、内面と行動が異なることが少ない人と述べている。これらの違いは、その人の世界観、社会的行動、他者との人間関係に大きな影響を及ぼすと述べている（Snyder, 1986 齊藤監訳 1998）。

母親が育児によって人間的な成長をする軌跡をみる研究の中では、柔軟性、自己抑制、視野の広がり、自己の強さ、生きがいなど多岐にわたり「親となる」ことの発達を示されているが、それはいずれの面でも父親より著しい（柏木・若松、1994）ことがわかっている。しかし、尾形（2011）は父親の存在が家族システム論の中で論じられていることを指摘しているが、柏木（2011）は、子育てに積極的に関与している父親は、子どもとの日常的な関わりにより子への関心を強め、子どもの心の動きや体の状況に対しても共感を持って理解するようになる」と述べている。こうしたセルフモニター機能がたかければ、家族内での子どもの様子のみならず、父親と母親の価値観の違いについても相互理解を高めることができると期待される。

したがって、本研究は、核家族化の進行と家族の個人化（佐々木、1996）によって変革し続け

ている現代日本において、育児をしている父親及び母親の成長発達を世代継承性 (Generativity) と Self-Monitoring の観点で明らかにすることを目的としている。

2. 方 法

事前に幼稚園、認定こども園合わせて4園の園長に調査を依頼し承諾を得た。乳幼児を養育している両親を対象に、子育てに関する質問紙調査を実施した。本研究は、学内の特定課題研究演習倫理審査委員会の承認を受けて実施した。

調査協力者

調査対象者は山梨県の認定こども園及び青森県の幼稚園2園に子どもが通園している10代から50代までの保護者計369名(父親137名、母親232名)であった。調査は各認定こども園・幼稚園を通じて通園している全世帯に文書により説明合意を得て、質問紙への協力を依頼した。謝礼は提示していない。質問紙の表紙に調査協力が任意であること、データは統計的に処理され個人の特長がされないことを説明した。回答は無記名で行われ、回答の所要時間は10分程度であった。個別自記入形式の質問紙は、回収期限を配布後10日から2週間後に回収する旨を明記し、各園出入口に設置した厳封されたボックスにて回収した。調査は、2018年8月30日から9月26日に行った。

全回答者218名のうち、調査項目に記入漏れのあったものは分析の対象外とした。また、明らかな虚偽回答を含むと判断された回答者を除いた。以上の結果、有効回答者は208名(男性53名、女性155名)であった。対象者のプロフィール分布を表1に示した。

表1 回答者の年代・性別構成人数

	18～19歳	20～29歳	30～39歳	40～49歳	50～59歳	合計
男性	1	0	32	18	2	53
女性	0	11	103	41	0	155
合計	1	11	135	59	2	208

調査内容

本調査の質問紙は、フェイスシートとQ1からQ3で構成されていた。

(1) フェイスシート

性別、年代、仕事の有無、業種、勤務体系、1週間の勤務日数、子供の数、子供の年齢、結婚の有無、パートナーとの同居の有無、祖父母・その他親族との同居の有無の記入を求めた。

(2) Self-Monitoring 尺度 (Q1)

Self-Monitoring については、岩淵・田中・中里(1982)がSnyder(1974)の作成した尺度を

邦訳した 25 項目による尺度を用いた。

本尺度は「外向性」「他者指向性」「演技性」の 3 因子が抽出され下位尺度ごとの得点も算出できる。原版では真偽法だったが本尺度の構造が Snyder の仮定する単一成分か、多次元的な構造かを解明するため 25 項目それぞれ「非常にそう思う」から「全くそう思わない」までの 5 件法に変換されている（岩淵・田中・中里、1982）。尺度作成時の調査対象者は大学生 500 名（男女各 250 名）であり、岩淵・田中・中里（1982）により信頼性、および構成概念妥当性は示された。

(3) 改訂版世代性関心尺度 (Q2)

世代継承性 (Generativity) については、改訂版世代性関心尺度を用いた。改訂版世代性関心尺度は 2007 年に丸島・有光により作成され「創造性」「世話」「世代継承性」の 3 因子で構成され、20 項目それぞれ「全く当てはまらない」「どちらかといえば当てはまらない」「どちらかといえば当てはまる」「非常に当てはまる」までの 4 件法で回答を求めた。「全く当てはまらない (1 点)」「どちらかといえば当てはまらない (2 点)」「どちらかといえば当てはまる (3 点)」「非常に当てはまる (4 点)」と回答を得点化したのち、3 つの下位因子「創造性」「世話」「世代継承性」の項目ごとに集計して項目得点を算出した。

作成の際には 27 歳から 84 歳の成人 996 名（平均年齢 54.5 ± 13.5 歳）を分析対象とした。丸島・有光（2007）により信頼性及び妥当性は示された。

(4) 改訂版世代性行動尺度 (Q3)

上述の改訂版世代性関心尺度と合わせて丸島・有光（2007）が 23 項目の尺度を作成した。改訂版世代性行動尺度（2007）は、「創造的行為」「世話行為」「世代継承性行為」の 3 つの因子によって構成されており、23 項目それぞれ過去 2 か月間に行った回数により「0 回」「1 回」「2 回以上」の 3 件法で回答を求めた。「0 回 (1 点)」「1 回 (2 点)」「2 回以上 (3 点)」と回答を得点化したのち、3 つの下位因子「創造的行為」「世話行為」「世代継承性行為」の項目ごとに集計して項目得点を算出する。丸島・有光（2007）により信頼性及び妥当性は示された。

表 2 質問紙の構成

(1)	フェイスシート
(2)	セルフ・モニタリング尺度 (Q1)
(3)	改訂版世代性関心尺度 (Q2)
(4)	改訂版世代性行動尺度 (Q3)

解析方法

データの解析は、Self-Monitoring 尺度の因子分析は統計ソフト「R (Ver. 3. 5. 4)」を、その他の解析は「SPSS (Ver. 24)」を用いた。

3. 結 果

本章では、まず Self-Monitoring 尺度の因子分析の結果について述べ、次に各尺度得点の父親と母親の差と両尺度の相関を記述する。

Self-Monitoring の構造 (因子分析の結果)

岩淵・田中・中里 (1982) によると、「Snyder (1974) は Self-Monitoring を状況や他者の行動に基づいて自己の表出行動 (expressive-behavior) や自己呈示 (Self-presentation) が、社会的に適切なのかを観察し (Self-observation)、自己の行動を統制すること (Self-control) であると定義」している。さらに、個人の社会的行動は外的要因と内的要因のいずれかの情報に基づいて決定されていると説明し、その行動の傾向が外的な状況や対人場面における外的要因に基づく傾向の強い人を高い SM とし、一方、自己の内的状態や態度などの内的要因に基づく傾向の強い人を低い SM とした。Self-Monitoring 尺度は、このような SM における個人差を測定するため作成された。

Self-Monitoring 得点 (以下 SM 得点) は、25 項目の平均値及び標準偏差 (SD) を全体、及び男女別に算出した。また、これら Self-Monitoring に関する 25 項目について岩淵・田中・中里 (1982) が標準化した対象は大学生で、今回の調査対象者と年代に隔たりがあったことから因子分析 (プロマックス回転) を行った (表 3)。その結果、スクリープロットから 3 因子を抽出した。3 因子の累積寄与率は 31.1% であった。他の因子の影響を除去した場合の固有値は第 1 因子 1.94、第 2 因子 2.87、第 3 因子 1.42、他の因子の影響を無視した場合の固有値は第 1 因子 3.15、第 2 因子 3.48、第 3 因子 2.95 であった。

第 1 因子には他者の求める自分を演出し、人間関係の潤滑油として自分を位置付ける気持ちを表す因子と解釈された。そこで、この因子は“サービス精神”因子と命名した。第 2 因子は、自らの行動を他者の反応や他者の反応を予測して合わせる気持ちを表す因子と解釈された。そこで、この因子は“他者指向性”因子と命名した。第 3 因子は、行動に自分自身が想定している役割を与え、他者との良好な関係を作ることや、維持したい気持ちを表す因子と解釈された。そこで、この因子は“演技性”因子と命名された。

このように、Self-Monitoring に関する項目は“サービス精神”“他者指向性”“演技性”から構成されていることが明らかとなった。また、他者指向性の因子の構成項目は、岩淵・田中・中里 (1982) の大学生を対象として標準化された構成項目と全く同じ結果となったが、“サービス精神”の構成項目は標準化された「外向性」因子の構成項目とは 1 つも共通する項目はなく、また、“演技性”因子の構成項目は、標準化された構成項目と 4 つの項目が共通していた。

表3 Self-Monitoring 尺度の因子分析（プロマックス回転）結果

	Factors		
	サービス精神	他者指向性	演技性
18. 自分はエンターテイナーであると思ったことがある。	0.165	0.168	0.519
19. 仲良くやっていたり、好かれたりするために、他の人が自分に望んでいることをする方だ。	0.117	0.732	
19. 仲良くやっていたり、好かれたりするために、他の人が自分に望んでいることをする方だ。	0.117	0.732	
15. 本当は楽しくなくても、楽しそうに振るまうことがよくある。	-0.210	0.661	
10. 実際以上に感動しているかのように振るまうことがある。	-0.156	0.517	0.184
6. 自分を印象づけたり、他の人を楽しませようとして、演技することがある。		0.496	0.316
11. 喜劇を見ているとき、1人よりみんなと一緒にの方がよく笑う。		0.467	-0.221
13. 状況や相手が異なれば、自分も違うように振るまうことがよくある。	-0.184	0.439	0.128
25. 本当はきれいな相手でも表面的にはうまく付き合っている。		0.416	
7. いろんな場面でどう振るまうていいかわからないとき、他の人の行動を見てヒントにする。		0.394	
16. 私は、常に見かけのままの人間というわけではない。		0.260	
24. 良かれと思えば、相手の目を見て、真面目な顔をしながら、うそをつくことができる。	-0.269	0.259	0.430
8. 多分、良い役者になれるだろう。			0.801
5. あまり詳しく知らないトピックでも、即興のスピーチができる。			0.578
18. 自分はエンターテイナーであると思ったことがある。	0.165	0.168	0.519
24. 良かれと思えば、相手の目を見て、真面目な顔をしながら、うそをつくことができる。	-0.269	0.259	0.430
9. 映画や本、音楽などを選ぶとき、友人のアドバイスをめったに必要としない。	-0.118	-0.285	0.357
6. 自分を印象づけたり、他の人を楽しませようとして、演技することがある。		0.496	0.316
2. 自分の気持ちや、考え・信じていることを、行動にそのまま表す。		-0.163	0.294
10. 実際以上に感動しているかのように振るまうことがある。	-0.156	0.517	0.184
3. パーティーや集まりで、他の人が気に入るようなことを言ったりしようとはしない。		-0.401	0.150
1. 人の行動をまねるのは苦手だ。	-0.166	-0.193	
4. 確信を持っていることしか主張できない。	-0.211		
12. グループの中で、めったに注目的にならない。	-0.538		-0.114
14. 他の人に、自分に好意をもたせるのが、特別上手な方ではない。	-0.379	-0.260	-0.201
17. 人を喜ばせたり、人に気に入ってもらおうとして、自分の意見や振るまい方を変えたりしない。		-0.574	0.108
20. これまでに、ジェスチャーや即興の芝居のようなゲームで、うまくできたためしが無い。	-0.400		-0.196
21. いろいろな人や状況にあわせて、自分の行動を変えていくのは苦手だ。	-0.457	-0.240	
22. パーティーでは、冗談を言ったり、話したりするのは他の人に任せて、自分は黙っている方だ。	-0.788		
23. 人前ではきまりが悪くて思うように自分を出せない。	-0.912	0.130	0.107
因子間相関	サービス精神	—	
	他者指向性	.20	—
	演技性	.50	.31
固有値（他の因子の影響を除去した場合）		1.94	2.87
固有値（他の因子の影響を無視した場合）		3.15	3.48

3つの尺度の得点について

性差を検証するため、Self-Monitoring 尺度の3つの下位得点、世代性関心尺度の3つの下位得点、及び世代性行動尺度の世代継承性行為の下位得点を従属変数とし、男性、女性を独立変数としてt検定を実施した結果を表4に示す。その結果、世代性関心尺度の下位因子「世話」において女性が男性よりも有意に高かった ($t = 2.495$, $p < .05$)。また、同じく世代性関心尺度の下位因子「世代継承性」において男性が女性よりも有意に高かった ($t = -4.22$, $p = .001$)。

表4 SM 尺度、世代性関心・行動尺度 下位項目の平均値とt検定結果

		全体	男性	女性	t 値
(n =)		208	53	155	
セルフ・モニタリング	SM 得点 (SD)	72.27 (10.87)	72.17 (11.53)	72.31 (10.71)	0.08
	サービス精神 (SD)	6.86 (1.71)	6.64 (1.78)	6.93 (1.68)	1.06
	他者指向性 (SD)	33.21 (6.28)	33.57 (6.66)	33.09 (6.16)	-0.48
	演技性 (SD)	19.84 (4.42)	20.30 (4.93)	19.68 (4.24)	-0.89
世代性関心	創造性 (SD)	19.49 (4.04)	20.02 (3.44)	19.30 (4.22)	-1.11
	世話 (SD)	19.75 (2.65)	18.85 (2.62)	20.05 (3.15)	2.495*
	世代継承性 (SD)	10.89 (2.61)	12.15 (2.57)	10.46 (2.49)	-4.22**
世代性行動	世代継承性行為 (SD)	15.68 (3.34)	15.26 (3.56)	15.82 (3.27)	1.04

Signif.codes: ** $p < .001$ * $p < .05$

表5 SM 尺度、世代性関心・行動尺度 下位項目の中央値とマンホイットニーのU検定結果

		全体	男性	女性	有意確率
(n =)		208	53	155	
世代性行動	世話行為 (最小値)	6.00 (5.00)	7.00 (5.00)	6.00 (5.00)	0.00*
	創造的行為 (最小値)	9.00 (7.00)	10.00 (7.00)	9.00 (7.00)	0.65

Signif.codes: ** $p < .001$ * $p < .05$

一方、世代性行動尺度の下位因子「創造的行為」と「世話行為」の下位得点を従属変数とし、男性、女性を独立変数としてマンホイットニーのU検定を実施した結果を表5に示す。その結果、世代性行動尺度の「世話行為」において男性が女性よりも有意に高かった ($p < .05$)。

3つの尺度それぞれの下位得点を、性別（男女）、年代（10代・20代・30代・40代・50代）に分類した平均、SD 及び一元配置分散分析の結果を表6にまとめる。

表6 セルフ・モニタリング尺度・世代性関心尺度・世代性行動尺度
下位項目の平均及び標準偏差、一元配置分散分析

		全体	男性	女性	10代	20代	30代	40代	50代	F 値	有意 確率
(n =)		208	53	155	1	11	135	59	2		
セルフ・モニタリング	SM 得点 (SD)	72.27 (10.87)	72.17 (11.53)	72.31 (10.71)	— —	69.27 (13.05)	73.43 (11.00)	70.61 (9.65)	— —	1.70	0.63
	サービス精神 (SD)	6.86 (1.71)	6.64 (1.78)	6.93 (1.68)	— —	7.55 (2.18)	6.73 (1.74)	7.02 (1.56)	— —	3.17	0.34
	他者指向性 (SD)	33.21 (6.28)	33.57 (6.66)	33.09 (6.16)	— —	31.09 (8.06)	34.21 (6.04)	31.46 (5.95)	— —	0.91	0.50
	演技性 (SD)	19.84 (4.42)	20.30 (4.93)	19.68 (4.24)	— —	19.18 (3.79)	20.33 (4.51)	18.93 (4.14)	— —	1.29	0.42
世代性関心	創造性 (SD)	19.49 (4.04)	20.02 (3.44)	19.30 (4.22)	— —	19.18 (3.43)	19.64 (4.15)	19.22 (4.01)	— —	0.34	0.13
	世話 (SD)	19.75 (2.65)	18.85 (2.62)	20.05 (3.15)	— —	20.00 (3.03)	19.82 (3.08)	19.49 (3.12)	— —	0.28	0.14
	世代継承性 (SD)	10.89 (2.61)	12.15 (2.57)	10.46 (2.49)	— —	8.45 (2.25)	11.16 (2.63)	10.68 (2.47)	— —	3.22	0.87
世代性行動	世代継承性行為 (SD)	15.68 (3.34)	15.26 (3.56)	15.82 (3.27)	— —	15.55 (2.29)	15.90 (3.55)	15.10 (2.97)	— —	0.96	0.78

※ 10代及び50代については、対象者が少ないため匿名性を考慮し個別の数値は省略している。

まず、SM 得点については、それぞれの性別による統計的に有意な差は見られなかった。また、年代別にも統計的には有意な差はみられなかった。10代 ($n = 1$) と 50代 ($n = 2$) で数値に偏りが見られることを考慮するが、SM 得点、他者指向性、演技性のいずれも 30代が最も平均が高く、50代の二人が最も低かった。また、サービス精神は 20代が最も平均が高く、30代が最も平均が低かった。

次に、世代性関心尺度は、「創造性」の項目は 8 項目、「世話」の項目は 7 項目、「世代継承性」の項目は 5 項目だった。それぞれの下位因子の性別の平均点と SD をみると、創造性因子と世代継承性因子とは女性よりも男性の平均がおおよそ 1 ポイント程度高かった。一方、世話因子では、男性より女性の平均が 1.2 ポイント高かった。さらに、下位因子の年代別の平均及び SD をみて

みると年代による平均の差はそれぞれ僅差であった。

次に、世代性行動尺度は、「創造的行為」の項目は、7 項目、「世話行為」の項目も 7 項目、「世代継承性行為」は、9 項目だった。それぞれの下位因子の度数分布は、世代継承性行為のみが正規分布を示したが、創造的行為及び世話行為においては一峰分布を示す非正規分布となった。このため、世代継承行為のみ平均値と SD を算出した結果、平均のみ 50 代、20 代、30 代、40 代、10 代の順番で高く、男性より女性の方が平均は 0.45 ポイント高かったが、統計的に有意な差は見られなかった。

一方、世話行為と創造的行為は一峰分布を示す非正規分布だったため中央値及び最小値を、表 7 に示した。世話行為因子の中央値は男性の方が女性より 1.0 高く、最小値はいずれも 5.0 だった。年代別では、50 代の中央値は 12.0、10 代の中央値は 10.0 で、20 代、30 代、40 代の中央値はいずれも 6.0、最小値は 5.0 だった。また、創造的行為の中央値と最小値は、中央値は男性が女性よりも高く最小値はいずれも 7.0 だった。中央値は 10.0、最小値は 7.0、女性の中央値は 9.0 で、最小値は 7.0 だった。年代別にみると、中央値は 30 代、50 代、20 代、10 代、40 代の順で高く、最小値はいずれも 7.0 だった。

表 7 セルフ・モニタリング尺度・世代性関心尺度・世代性行動尺度 下位項目の中央値と幅

		全体	男性	女性	10 代	20 代	30 代	40 代	50 代
(n =)		208	53	155	1	11	135	59	2
世代性行動	世話行為 (最小値)	6.00 (5.00)	7.00 (5.00)	6.00 (5.00)	10.00 (10.00)	6.00 (5.00)	6.00 (5.00)	6.00 (5.00)	12.00 (12.00)
	創造的行為 (最小値)	9.00 (7.00)	10.00 (7.00)	9.00 (7.00)	9.00 (9.00)	9.00 (7.00)	10.00 (7.00)	8.00 (7.00)	9.50 (7.00)

3 つの尺度の相関関係

Self-Monitoring と世代性関心及び世代性行動との相関係数を算出したところ、表 8、9 に示す結果が得られた。Self-Monitoring の総合得点と Self-Monitoring 尺度のサービス精神以外の全てと 3 つの尺度の全ての因子との間に有意水準 5% で有意な相関を示した。Self-Monitoring の下位因子であるサービス精神とは、世代性行動の創造的行為以外のその他全ての因子との間に有意水準 5% で有意な負の相関を示した。同じく Self-Monitoring の下位因子の他者指向性とは世代性関心の世話、世代性行動の創造的行為及び世代継承性行為以外の因子との間に有意水準 5% で有意な相関を示した。Self-Monitoring の 3 つ目の下位因子である演技性とは、世代性関心の下位因子である世話以外との間に有意水準 5% で有意な相関を示した。

また、世代性関心の下位因子創造性とは、全ての因子との間に有意水準 5% で有意な相関を示し、同じく世代性関心の下位因子世話、及び世代継承性もそれぞれの因子との間に有意水準 5% で有意な相関を示した。

最後に、世代性行動の世話行為とは世代性行動の創造的行為との間に有意水準 5% で有意な相関を示したが、世代性行動の世代継承行為との間には有意な相関は見られなかった。また、世代

性行動の創造的行為と世代性行為の世代継承性行為との間には有意な相関は見られなかった。

これらの結果から、高モニターの人と世代継承性（Generativity）の関心及び行動とは相関関係にあることが示唆された。

表8 セルフ・モニタリング尺度・世代性関心尺度・世代性行動尺度 下位項目のピアソンの相関係数

		セルフ・モニタリング				世代性関心			世代性行動		
		S M 得点	精 神 サ ー ビ ス	他 者 指 向 性	演 技 性	創 造 性	世 話	世 代 継 承 性	世 話 行 為	創 造 的 行 為	行 為 世 代 継 承 性
モ ニ タ リ ン グ	SM 得点	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	サービス精神	-.745**	1	—	—	—	—	—	—	—	—
	他者指向性	.824**	-.721**	1	—	—	—	—	—	—	—
	演技性	.809**	-.709**	.747**	1	—	—	—	—	—	—
世 代 性 関 心	創造性	.382**	-.326**	.383**	.374**	1	—	—	—	—	—
	世話	.144*	-.193**	.062	.025	.296**	1	—	—	—	—
	世代継承性	.284**	-.294**	.185**	.290**	.322**	.321**	1	—	—	—
	世代継承性行為	.221**	-.143**	.129	.272**	.277**	.244**	.221**	18.5	0.962	1

Signif. codes: ** $p < .001$ * $p < .005$

表9 セルフ・モニタリング尺度・世代性関心尺度・世代性行動尺度 下位項目のスピアマンの相関係数

		セルフ・モニタリング				世代性関心			世代性行動		
		S M 得点	精 神 サ ー ビ ス	他 者 指 向 性	演 技 性	創 造 性	世 話	世 代 継 承 性	世 話 行 為	創 造 的 行 為	行 為 世 代 継 承 性
世 代 性 行 動	世話行為	.360**	-.285**	.343**	.329**	.285**	.094**	.344**	1	—	—
	創造的行為	.143*	-.109	.081	.199**	.392**	.198**	.238**	.512**	1	—
	世代継承性行為										

Signif. codes: ** $p < .001$ * $p < .005$

4. 考 察

本章では、育児期の父親および母親、またはその年代に Self-Monitoring と世代継承性 (Generativity) の発達にどのような影響があるのかを検討する。まず Self-Monitoring について Self-Monitoring 尺度に関して考察し、次に世代継承性 (Generativity) について世代性関心及び世代性行動尺度に関して考察し、3つの尺度それぞれの関連について考察する。

Self-Monitoring 尺度に関する考察

まずは、因子分析の結果について考察する。

岩淵・田中・中里 (1982) が標準化した際は、「外向的」「他者指向性」「演技性」の3つの因子が抽出された。本調査において抽出されなかった「外向的」因子は Snyder (1979a, p.198) が「他者と知り合う初期の過程では、高い Self-Monitoring の個人は社会的相互作用において活動的・率先的・支持的なアプローチをとる」と述べていることに合致して命名されている。しかし、本調査で抽出されたのは「自分はエンターテイナーであると思ったことがある」「仲良くやっていたり、好かれたりするために、他の人が自分に望んでいることをする方だ」の2項目であり、活動的、率先的、支持的なアプローチという側面よりは他者の求める自分を演出し、人間関係の潤滑油として自分を位置付ける気持ちを表す因子と解釈し「サービス精神」と命名した。岩淵・田中・中里 (1982) が大学生を対象にした際には抽出されなかったこの項目が、現在の子育て期の男女から抽出されたことは、中年期は白井 (2011) の述べている青年期のポジティブな未来志向に中年期以降の体の衰えや能力の天井感をやわらかに受け止めるポジティブな現在思考との再体制化によって「しなやか」に生きることが重要であることを支持した。これは、成人期の特徴の一つに、学生時代と比較して交友関係や人間関係が格段に広がることも意味しており、所属した社会をある程度迎合している様が映し出されていると考えられる。

第2因子の「他者指向性」は、岩淵・田中・中里 (1982) が大学生に実施し標準化された際に抽出された項目と全て一致していた。このことから、25年前の大学生と現代日本の育児期の男女との間に差異がみられないことが明確になった。併せて、ある状況で適切な行動をとることへの関心度の高さや自己の感情の統制力は、25年前と現代では年代や時代を超えて共通する Self-Monitoring 力であることが示された。

第3因子の「演技性」は、岩淵・田中・中里 (1982) の調査により抽出された4項目全てを含み、その他に5つの項目を追加した形で構成された。追加された項目が「良かれと思えば、相手の目を見て、真面目な顔をしながら、うそをつくことができる」「自分の気持ちや、考え・信じていることを、行動にそのまま表す」、「実際以上に感動しているかのように振るまうことがある」と、反転項目の「映画や本、音楽などを選ぶとき、友人のアドバイスをめったに必要としない」「パーティーや集まりで、他の人が気に入るようなことを言ったりしようとはしない」であった。このように、岩淵・田中・中里 (1982) が、大学生に「場に応じてさまざまな役割を演じる傾向で、他者を喜ばせたり、会話が流暢である特性を示している」と評価したよりもさらに演技性の項目が増えており、育児期の男女がより豊かに役割を演じる傾向が示された。

次に、Self-Monitoring 尺度得点の男女差について考察する。「他者指向性」は、ある状況で適

切な行動をとることへの関心度の高さや自己の感情の統制力を示し、「演技性」は場に応じてさまざまな役割を演じる傾向で、他者を喜ばせたり、会話が流暢である特性を示している（岩淵・田中・中里、1982）。このことから、育児期の父親と母親を比べた場合、ある程度日常生活の中で交流する集団やメンバーが定まり良好な関係性が重視される人間関係の中にいる母親の方が父親に比べてスコアが高くなる傾向があると予想できた。一方、因子分析の結果抽出された「サービス精神」は、他者の求める自分を演出し、人間関係の潤滑油として自分を位置付ける気持ちを表す因子と解釈されていることから、父は母に比べて「サービス精神」のスコアが高くなると予想できた。

結果は、表6のとおり統計的に有意な性差は見られなかった。これは、柏木・若松（1994）が示した、母親が育児によって人間的な成長の軌跡をみる研究の中では、柔軟性、自己抑制、視野の広がり、自己の強さ、生きがいなど多岐にわたり「親となる」ことの発達が示され、それはいずれの面でも父親より母親が著しいという説を覆す結果となった。一方で、現代では共働き世帯が多く、従来の母親像のみならず多様な女性像を反映している可能性を考慮する必要があるかもしれない。

一方、年代別の比較を見てみると、回答者数が少ない10代と50代は検討から外したところ、Self-Monitoring 得点の合計の平均値は30代が最も増加し40代で減少していたが、SDは年代が上がるにつれて減少していた。このことから、Self-Monitoring 得点は30代で最も増加するがその後減少するが、年代が上がるにつれて集団としてのばらつきは減少することが示された。これは佐々木（1996）の述べた、父親となり、養育を行う生活プロセスは人間発達の可能性の中で最も意義深い変容経験であり、それが最も顕著な年代が30代である可能性が示唆される結果となった。

世代性関心尺度及び世代性行動尺度に関する考察

次に、世代継承性（Generativity）について、世代性関心尺度及び世代性行動尺度の結果から考察する。改訂版世代性関心尺度の下位因子「創造性」は自らに何かを創作すること、「世代継承性」は成人の「象徴的な永遠の生命」を後世につなげたい欲求を示している（丸島・有光、2007）。このため、母に比べて父は高いスコアであることが予想され、反面、「世話」は母が高いスコアであると予想した。表6の結果にあるとおり、この予想は支持された。このことは岡本（2018）が『『世代継承性』とは、次世代の創生とケアを意味し①次世代を生み出すことと育てること、次世代の成長に深い関心を注ぎ、関与すること、②ものを生み出すこと・創造すること、③他者を支えることなど』と述べ、さらにこの概念には親による子育てから専門家が弟子を育成すること、仕事を通じて広く次世代の社会を育てることまで、さまざまな次元の営みが含まれていることを男女ともに支持する結果となった（岡本、2018）。また、「創造性」と「世代継承性」は父親が高く、「世話」は母親が高いという結果は、現代の日本でも育児における母親は衣食住に直接的に関与する世話役割を担っており、一方父親は家族の営みを金銭的、社会的な活動などに貢献したり維持する役割を担っていることが示唆された。これは、飯野（2007）が主張した「父親自身が自らに「男尊女卑」という傾向が強かった伝統的な日本社会の性別役割の垣根を飛び越えることは、女性にとっては昇進だったが男性にとっては降格の象徴でしかなく、男性優位

の伝統的な性別役割や価値観こそが男性の生き方の多様化を阻んでいる」ことがその一因であるといえる。一方で、尾形 (2011) の「父親が家族との交流を多く取っている場合に、自分が家族の一員であるという感覚が斉一性と連続性をもって自分自身の中に存在し、また、それが他の家族成員にも承認されているという認識と定義される家族アイデンティティに正の影響を及ぼす」という指摘のとおり、父親の家族との交流が父親の役割の重要な一つである可能性が示される結果となった。

さて、Erikson が提示した世代継承性 (Generativity) vs. 停滞 (Stagnation) について、「結論的に世代性は中年期において比較的突出した発達と考えられても、むしろ成人期全体に通じる心理社会的な課題ととらえても妥当である」ことについて表 6 から考察する。20 代から 30 代は世代性関心尺度及び世代性行動尺度のどの因子の平均も増加しているが、いずれも 40 代で微減していた。本調査では養育者の年代のみの比較であり、いずれも乳幼児を養育している方々からの回答ではあるが、年代が上がるにつれ父親と母親の職場などでの社会的な立場の変化に伴い役割も変化していることはある程度共通していると考えられる。このことと関連して、家庭のために割く時間も少なからず変化していると予想され、それによる家庭内での父親、母親、お互いの役割に変化が生じていることも考えられる。また、20 代、30 代で出産して育児期を過ごした 40 代の母親は、育児からある程度解放されそれまでは困難だった母自身の時間を作り有意義に活用を始める変化の時を迎える。他方、父親の職場環境は柏木 (2011) の指摘した、上司より先に帰りにくく、残業する人が高評価をされ、父親本人に仕事の裁量度がないことで、仕事と個人の時間のバランスがとりにくい状況であることが影響している可能性が示された。これらのことから、20 代から 40 代の期間は父親も母親も新たな役割を担い戸惑い、苦悩しながらも喜びや感動を抱く日々の中で成長発達を遂げていることが示唆された。

3 つの尺度の相関に関する考察

3 つの尺度のそれぞれの相関について表 8 及び表 9 をもとに考察する。

まず、世代性関心尺度と世代性行動尺度の間で「世話」と「世話行為」、「創造性」と「創造的行為」、「世代継承性」と「世代継承性行為」との間に高い相関関係がみられた。世代継承性 (Generativity) は中年期において比較的突出した発達と考えられているが、本研究では 20 代から 40 代の 3 つの年代にわたるデータを検証した。Erikson は成人期をライフイベントごとに「親密と孤立 対 自己陶醉」「Generativity 対 停滞」「Integrity 対 絶望と嫌悪」の 3 つの時期に分類した (Erikson, 1980 西平・中島訳 2011)。本調査の 20 代から 40 代までの世代性関心尺度と世代性行動尺度の結果にそれぞれ高い相関が見られたことから世代継承性 (Generativity) は 20 代から 40 代にわたる心理社会的な課題であることが支持された。

反面、丸島・有光 (2007) の調査の結果に反し、創造的行為と世代継承性行為および世話行為には相関がみられなかった。このことは、丸島・有光 (2007) の 27 歳から 84 歳の成人 (平均年齢 54.5 ± 13.5 歳) を分析対象としているのとは比べ、本調査は調査協力者が極めて少ない 10 代と 50 代以外で検証したことが遠因と考えられる。本調査では実際の対象分布状況は 20 代から 40 代であり、最も多い年代は 30 代であった。このため年代分布の差異が結果に影響していることが予想される。一方で、丸島・有光 (2007) が分析した際に見られた相関関係が本調査に見られな

かったことは、世代継承性行為の発達には年齢の影響があることを示している。これは、Eriksonの主張している世代継承性（Generativity）の段階までの発達が、次の老年期の精神的な豊かさに影響を与えること、具体的にはそれまでの生き様が社会的にも身体的にも精神的にも良くも悪くも反映される時期であることも示唆している。さらに、世代継承性（Generativity）における世代行動性尺度の創造的行為、世代継承性行為、世話行為の3つの行動に相関がみられず、世代関心性尺度の創造性、世話、世代継承性の3つにはそれぞれ相関が見られることから、心理的努力それぞれは影響しあっているが行為それぞれは独立して行われていることが示された。

最後に、Self-Monitoring 尺度と、改訂版世代性関心尺度と改訂版世代性行動尺度のそれぞれの相関関係について考察する。

3つの尺度それぞれ3つの下位因子と Self-Monitoring 尺度の総合得点との相関関係は、表8及び表9のとおりである。ほぼ全ての因子間で強い相関が見られた。特に、Self-Monitoring 尺度と育児期の世代性関心尺度と世代性行動尺度とがそれぞれ相関関係を示していることから、Snyder（1986）が定義する自己の表向きの外見と内側の現実という複雑な心の織物と世代継承性（Generativity）の心理的側面と行動的側面との間に関連があることが示唆された。これらは、育児期の父親及び母親の個体間では、表向きの外見と内側の現実と共に世代性関心と世代性行動とが続べられ互いに整合性をつけている可能性が示された。併せて表4および表5より、Self-Monitoring 尺度の3つの下位因子も世代性関心尺度及び世代性行動尺度のそれぞれ3つの下位因子にも性別による有意な差は確認されなかった。このことから、育児が親に与える影響には性別による違いはなく、年代による違いは確認されたことから主に育児というライフイベントが父親及び母親の人間発達に影響を与えていることが示唆された。

5. 問題点及び今後の課題

本研究の問題点及び課題は以下の3点である。

第1に、調査対象者の偏りである。調査対象者を保育園・幼稚園・認定こども園に通園している保護者としたが、調査協力頂いた3園のうち2園は幼稚園だったため、10代、20代、50代の調査協力者が他と比べると少なかった。今後は各園を利用している保護者の年代の特色も考慮に入れて調査協力依頼を行いたい。

第2に、改訂版世代性行動尺度の2因子が想定外に非正規分布であった。分布については質問紙を回収、集計してみなければわからないが、事前準備を更に詳細に行うことでより丁寧な統計分析ができたのではないかと考えられる。

最後に、育児期という人生の中で人は男女の別なく新たな役割を担う期間に成長発達を遂げていることが本研究で示唆された。その一方で育児期という特別な期間に孤独を深めたり、育児不安を抱く保護者がおり、時には児童虐待やネグレクトが発生している。今後は、世代継承性（Generativity）との対概念停滞（Stagnation）への配慮や支援について更に検証を深めていきたい。

謝辞

本稿は、2018 年武蔵野大学大学院特定課題研究演習として提出した論文に一部加筆修正を加えたものである。本研究の主旨にご賛同いただき貴重なお時間を割いてご協力くださった回答者の皆様、快くご支援くださった幼稚園、認定こども園の方々に心から御礼申し上げます。また、ご指導を賜った指導教員の野口普子先生には、学びの楽しさと苦しみと共に礼節について丁寧に道を照らしていただきました。ここに心から感謝申し上げます。

注

- i 2008 年 4 月改正施行
- ii 2008 年 4 月改正施行
- iii 「子ども・子育て支援法」「就学前の子供に関する教育、保育等の総合的な提供の推進に関する法律の一部を改正する法律」「子ども・子育て支援法及び就学前の子供に関する教育、保育等の総合的な提供の推進に関する法律の一部を改正する法律の施行に伴う関係法律の整備等に関する法律」育児期の女性の職場復帰、社会参加を後押しする側面を持つ「子ども・子育て支援新制度」
- iv 女性の職業生活における活躍の推進に関する法律

引用文献

- Bowlby, J. 黒田実郎・大羽葵・岡田洋子・黒田聖一 (訳) (1997). *母子関係の理論: I 愛着行動*. 岩崎学術出版社.
- Bowlby, J. 黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子 (訳) (1998). *母子関係の理論: II 分離不安*. 岩崎学術出版社.
- Bowlby, J. 黒田実郎・吉田恒子・横浜恵三子 (訳) (1999). *母子関係の理論: III 対象喪失*. 岩崎学術出版社.
- Erikson, E.H. 西平直・中島由恵 (訳) (2011). *アイデンティティとライフサイクル*. 誠信書房.
- Snyder, M. 齊藤勇 (訳) (1998). *カメレオン人間の性格—セルフ・モニタリングの心理学—*. 川島書店.
- Snyder, M. (1974). SELF-MONITORING OF EXPRESSIVE BEHAVIOR. *Journal of Personality and Social Psychology*, 30 (4), 526-537.
- Snyder, M. (1979b). Self-monitoring processes. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology*. Vol. 12. New York: Academic Press. pp. 85-128.
- 岩淵千明・田中国夫・中里浩明. (1982). セルフ・モニタリング尺度に関する研究. *心理学研究*, 53 (1), 54-57.
- 岡本祐子. (1996). 育児期における女性のアイデンティティ様態と家族関係に関する研究. *日本家政学会誌*, 47 (9), 849-860.
- 岡本祐子・上手由香・高野恵代 (編). (2018). *世代継承性研究の展望—アイデンティティから世代継承性へ—* (pp. 3-6). 東京: ナカニシヤ出版.
- 岡本祐子. (2002). 成人女性のアイデンティティ及び子育て意識に関する日中比較研究. *日本家政学会誌*, 53 (2), 193-198.
- 丸島令子. (2005). 世代性尺度の作成—世代性関心と行動モデルの測定—. *心理臨床学研究* 23 (4), 422-433.
- 丸島令子・有光興記. (2007). 世代性関心と世代性行動尺度の改訂版作成と信頼性、妥当性の検討. *心理学研究*, 78 (3).
- 串崎幸代. (2005). E. H. Erikson のジェネラティビティ概念に関する基礎的研究—多面的なジェネラティビティ尺度の開発を通して—. *心理臨床学研究*, 23 (2), 197-208.
- 荒牧美佐子. (2008). 育児への負担感・不安感・肯定感とその関連要因の違い: 未就学児を持つ母親を対象に. *発達心理学研究*, 19, 87-97.
- 佐々木保行. (1996). 父親の発達研究と家族システム—生涯発達心理学的アプローチ—. *教育心理学年報*, 35.

- 小原倫子. (2005). 母親の情動共感性及び情緒応答性と育児困難感との関連. *発達心理学研究*, 16, 92-102.
- 小出まみ. (1990). カナダの子育てに見る支えあい. *日本保育学会研究論文集*, 43, 644-645.
- 小林麻子・稲越孝雄・会沢信彦. (2009). 図式的投影法を用いた母親の家族認識 (1) —現家族に対して—. *文教大学生科学研究*, 31, 285-294.
- 小林麻子・稲越孝雄・会沢信彦. (2010). 図式投影法を用いた母親の家族認識 (2) —青年期の家族関係—. *文教大学生科学研究*, 32, 99-108.
- 小林麻子・会沢信彦. (2011). 図式的投影法を用いた母親の家族認識 (3) —結婚, 妊娠, 出産を通して—. *文教大学生科学研究*, 33, 147-156.
- 小林麻子・会沢信彦. (2012). 図式的投影法を用いた母親の家族認識 (4) —育児場面における母親の感情と家族への評価—. *文教大学生科学研究*, 34, 79-90.
- 小林麻子・会沢信彦. (2013). 図式的投影法を用いた母親の家族認識 (5) —現在の子供と夫に対する感情—. *文教大学生科学研究*, 35, 101-110.
- 小林麻子・会沢信彦. (2014). 図式的投影法を用いた母親の家族認識 (6) —現在の家族と理想の家族—. *文教大学生科学研究*, 36, 215-225.
- 森下葉子. (2006). 父親になることによる発達とそれに関わる要因. *発達心理学研究*, 17 (2), 182-192.
- 大場宏美・藤原佳典・村山陽・野中久美子・安永正史・倉岡正高・竹内瑠美. (2013). 世代間交流プログラムの評価に向けた日本語版 generativity 尺度作成の試み. *日本世代間交流学会誌*, 3 (1), 59-65.
- 上里一郎 (監修) 中西信男・佐方哲彦. (1993). EPSI エリクソン心理社会的段階目録検査. *心理アセスメントハンドブック*, 東京: 西村書店, pp.419-431.
- 田淵恵. (2010). 世代性 (Generativity) の概念と尺度の変遷. *生老病死の行動科学*, 13, 15-20.
- 島崎志歩・田中奈緒子. (2007). 父親の生活実態と発達—就労・家庭状況・子育て関与との関連—. *昭和女子大学*, 10, 109-117.
- 柏木恵子. (2008). 子どもが育つ条件—家族心理学から考える. 東京: 岩波書店.
- 柏木恵子. (2011). 父親になる, 父親をする 家族心理学の視点から. 東京: 岩波書店.
- 柏木恵子・若松素子. (1994). 「親となる」ことによる人格発達: 生涯発達の視点から親を研究する試み. *発達心理学研究*, 5, 72-83.
- 白井利明. (2004). 時間的展望とアイデンティティにおける家族成員間の関連—青年期後期の子供とその親である中年期夫婦を対象にして—. *大阪教育大学紀要 第IV部門*, 52, 241-251.
- 八幡 朝子・島谷 まき子. (2015). 育児関与による父親の発達—アイデンティティ変容過程に着目して—. *昭和女子大学生生活心理研究科紀要*, 17, 27-36.
- 榎本博明 (編). 飯野晴美. (2007). 現代のエスプリ別冊 セルフアイデンティティ拡散する男性像. 東京: 至文堂.
- 尾形和男. (2011). 青年の家族アイデンティティと父親のワーク・ライフ・バランス—母親の就労形態を含めた検討—. *愛知教育大学研究報告 教育科学編*, 60, 97-104.
- 菱谷純子・落合幸子・池田幸恭・高木有子. (2009). 青年期の次世代育成力尺度の開発とその検討. *日本母性衛生学会*, 50 (1), 132-140.
- 福田佳織・宮下一博. (2006). 子どものアタッチメント安定性と夫婦関係との関連—父子接触時間の長い家庭と短い家庭での相違—. *千葉大学教育学部研究紀要*, 54, 7-13.
- 矢澤澄子・国広陽子・天童睦子. (1999). 現代の父親の子育て意識と「父親アイデンティティ」—30代—40代の父親のライフスタイル調査から—. *東京女子大学社会学会紀要 経済と社会*, 27, 17-40.